

# 西照

西照寺々報「さいしょう」

第2号

1986年3月12日

発行 浄土真宗本願寺派・西照寺

高岡市吉久2丁目4-40

## 御恩と彼岸

桑本久栄

人間が他の動物と異なる点をお釈迦様は涅槃経に「多恩の故に他種と異なる」とお説きになられているのです。人間の人間たるいわれは、知恩つまり恩を知る動物であると、してみれば人間の価値をただ単に貧富で計るのではなくそれは恩知らずかどうかで計るべきだと思います。その恩知らずのところに家庭内暴力を始めとして金属バットによる両親殺害など現代世相の乱れの根源がある様に思われてなりません。では恩を知るとはどういう事でしょうか。いま恩という字を分解してみますと、それは原因の因と心の組合せで、因(もと)を心に戴くという字なのです。私が今現にここに生きているという事は、両親の暖かい慈愛を始めとして、目に見えるもの目に見えない数多くの恩恵に支えられ生かされているのです。その事に気付かされ、これらの原因を心に戴く時はじめて「有難うございました」「お蔭様で」と感謝の心をこめて、それらを受けとめて行く世界が展開するのです。

その中で最も身近かな因は両親で、その両親にも両親ありとその先祖を三十代迄さかのぼれば、実に十億七千七百七拾四萬五千八百式拾四人となり、その中の一つでも欠ければいまのこの私は存在しないという事です。

してみますと、ある事が当然ではなくまさに有る事難しといわねばなりません。この多くの支えで生かしてくれている恩恵に対する感謝の気持は、明日よりの、未来への出発点としての責務意識となつて、それらの恩恵に報わずにはおれないという思いとなつて湧き出てくるのです。どうか二度と通れない今日という道を心豊かに生きるため、この知恵の心を少しづつふくらませて行きたいものです。

次に私はお彼岸という言葉が好きです。

お彼岸とは一口に判り易くいえば、それは帰って行く心の故郷を持つことだと言って良いと聞いています。「旅の楽しさは、帰るべき家がなければなり。人生も又旅である。人によって長短あるもいずれば終る旅である。心の故郷(彼岸)を持つ事を忘れまい。」と言われます様に、旅を旅たらしめるものこそ帰るべき家が家なのです。帰るべき家がなければ、それは家出であつて旅ではなく放浪にすぎません。しかも人間は、いつ、どこで爆発するか判らない爆発物を背負つて旅する旅人なのです。なのに自分の爆発物だけは何時までも爆発しないものだとかをくくって、人や先、人や先とのんきに楽天的に旅をしていないでしょうか。

江戸後期の狂歌師の蜀山人の辞世の句が、この事をよく教えてくれています。それは「今までは人が死ぬと思つたにおれが死ぬとはこいつはたまらん」と。

死の問題は側面より見れば、ごく平凡な自然界の法則であり摂理に過ぎません。だが、ひとたび我や先きと自分の死の問題として正面より取り組んだ時は、これ程生々しく新鮮な問題はありません。死に目隠ししての生き方は、どれほど幸福であっても、それは偽りでしかありません。造花は美しいが香りはありません。生きた花は香りもあり散りもします。人間は自ら散つて行く事を問題にしてそこに始めて本当に生きる道が開けるのです。爆発物に早い遅いがありますが、何時散つても帰って行ける心の故郷。そこでは待たれる身である事の幸せをかみしめながら、せつかく恵まれた人生生きてきてよかつた、生きてきてよかつたと言える人生にしたいものです。

この彼岸への心の橋渡しをしていただけるのが、この私達の「西照会」「二・八会」の集いである事の恵みに、大きい喜びを感じさせていただけて居ります。み仏の光にてらされ、多くの人々の力によって生かされている事を自覚し、充実した人生を歩むために気持を新たにしている今日このごろです。

合掌

(西照寺門徒総代・丸栄運輸役員)

## ひかり来たりにて

## — 仏陀の出現 —

## (2) 世のしがらみを離れて (出家)

岡西法英

シッタール太子(後の釈尊)は家を捨てて王位を捨て、両親や妻子を捨て、財宝も快適な生活も捨てて、出家し、修行の旅に出られました。

誰にも代(か)わらえないのが老病死のこの身であり、他人に助けてもらいようのないのが悩める我が心であり、如何なる豊かな生活によっても埋めることのできないのが、人間の「不安」であることに気付かれたからでした。

ある四十代のご婦人が「私こそ誰よりも幸せ、と思えば思う程、この幸せが何時まで続くやらと不安でなりません」と漏らされたことを思い出します。どんなに人の世の幸せに恵まれてみても苦惱から逃れられないのが人間の偽らざる姿であることが知らされます。

しかも恵まれれば恵まれる程、それらに執(と)られ頼って、やがて失わねばならぬそれらを失うことを恐れ、深く縛られて、何より大切な「自分自身」を見失い、ひいては他の人々の心中を思わなくなっていくのが私共の悲しい実態ではないでしょうか。

若き者は老いたる人の「老いの悲しみ」を想(おも)わず、健やかなる者は病める人の「病める苦しみ」を想(おも)わず、富める者は貧しき人の「煩(わづ)いを想(おも)わず、地位ある者強き者は、地位なく弱き者をさげすみがちです。親あれば親、妻子あれば妻子を我が意の如くにふるまわせようとしてはたがいに争い悩んでいるのがあさましい私共のすがたです。若さや健康、富や地位、妻子眷属に愛着する心こそ、頼りにならないばかりか、やがて、老いを歎かせ、病に泣かせ、貧に打ちのめされ、地位の失墜におのかせるたねであるばかりか、現在の

理由なき不安」のたねであり、あらゆる差別の温床であり身をしばる縄であることに目覚められたが故の出家でした。

出家の生活はまことに厳しいものです。衣服は「袈裟」といって、墓場やごみ捨て場などから、古い布を拾い集め、布地のしつかりした部分だけを縫い合わせて、以前の雑色を消すため、また自分も他人もこれに愛着を起さなために柿渋色に染めたものを用いました。今日の袈裟のつぎ目の多い形はその名残りです。

食事は「托鉢」とか「乞食」といって、一日一度。午前中に、朝食の済んだ家の戸口に次々と沈黙のまま鉄鉢を持って立ち、その家の者が少しづつの残飯を差し出すのを集めるのです。当然の事ながら毎日一度の食事も確実にできる見込があるわけではありません。今日でも、お仏飯は日に一度、金属製の器に盛ってお供えし、朝上げて昼には下げる習慣があるのは、その名残りです。

住居はありません。「家なき者」として「樹下石上」の野宿暮らしが原則です。

若さと健康のシンボルである髪と鬚は、愛着を離れるために剃り落してしまいます。

袈裟と鉄鉢以外には何の所有物も蓄えありません。まさに出家の衣食住は、のら猫、野犬同様だといえましょう。それは言葉をかえて言えば、家庭のぬくもりや社会の保護を捨て離れ、離れた分だけこの世のあらゆるしがらみから解放された生活です。自分自身を抛りどころとして、他の何者にも頼ることもしぼられることもなく、人間というよりは、素裸の一個の生きものになりかえって自己自身を究めるための道であったともいえます。

ここから振り返ってみれば、我々の在家生活は、「家」という言葉に代表

されるこの世のしがらみに保護され、保護されている分だけ頼り、頼る分だけしぼられていて、本当の自己自身を見究めることのできない、あやふやな生活であると言うことができます。

「釈尊が「出家」することによって捨てられたものは物質的な意味の在家生活ばかりではありませんでした。いわば「世の中の常識」をも同時に捨てられたのです。それは既に述べたように、健康や若さ、富や地位、家庭や国を、より処とし、宝とし、しあわせのたねとして願い求めることが当然という世間の常識であります。と同時にその奥にある人生観でした。

「この世の中には、三つの誤った見方がある。もしもこれらの見方に従ってつきつめていけば、この世のすべてのことが否定されることになる。

一つには、ある人は、人間がこの世で経験する如何なることもすべて前世の業であると主張する。二つには、ある人は、それはすべて神のみ業であるという。三つには、またある人は、すべて因も縁もないものであるという。

もしも、すべてが前世の業によって定まっているならば、この世に於いては、善いことをするのも、悪いことをするのも、みな業であり、幸、不幸もすべて業となり、業のほかには何ものも存在しないことになる。したがって、人々に、これはしなければならぬ、これはしてはならぬという希望も努力もなくなり、世の中の進歩も改良もないことになる。

次に、神のみ業であるという説も、最後の因も縁もないとする説も同じ非難が浴びせられ、悪を離れ、善をなそうという意志も努力も意味もすべてなくなってしまう。」

(華嚴經)

第一の誤った見方(邪見)とは、言わば宿命論で、これから生れるのが、卜占による運勢判断です。未来の運命を予測することによって、災を避け、幸に近づく方策を立てようというわけですが、避けようとして避けられるくらいなら運命とはいえませぬし、運命だからとあきらめて人生の苦惱が解消できるものでもありません。

第二の誤った見方とは、言わば神意識論で、これから生れるのが神に対する祭祀や祈願です。しかし、老病死を代わってくれたり、無くしてくれたりする神などあるわけもなく、どんな偉大な神も手のほどこせないのが人の心ではないでしょうか。

第三の誤った見方とは、いわゆる偶然論で、これから生れるのが「早く生まれましょう」「水に流しましょう」「くよくよせず」「今さえ良ければ」という思想です。しかし、老病死は偶然にやってくるのではなく、生れた以上避けることのできない必然です。家庭のもめごとや戦争は偶然に起るのではなく、起るような家庭や社会のしくみと教育や人々の考え方がるからです。

これらの誤った見方に共通しているのは、自らの人生を自己自身の責任として受けとめようとしないうこと、自分自身を問う姿勢が根本的に欠けているために、自らを悔い改める努力をせずに、境遇や運命を変えようという方向へしか目が向かない点です。

今日でもこの三つが世の常識となっていることは変りがないようです。調子がいい時は「余り深く考えないで、くよくよせず」「具合の悪い事が襲ってくる」と「見てもらいに」、いよいよ切羽つまる「苦しい時の神のみ」という姿が目につきます。

釈尊が「悪いのたね」と見て捨てられたものを追い求め、調子がよい時は「神仏に感謝。御先祖のおかげ」と言い、具合が悪くなると「先祖のたたり。水子のたたり。日が悪い方が悪い。神も仏もあるものか」と叫ぶ悲しい人の世に真の安らぎとよろこびをもたらそうと立ち上がられたのが釈尊の出家であったのでした。

釈尊がお生れになった時、父王と母后は人相見に太子の将来を占わせました。春秋には神に農作を祈願する祭りも国を挙げて行われたようです。一子一孫が生れた後に出家されたのは、先祖をまつる子孫を残すことが義務とされた当時の習慣に従われたからとも言われています。また、宮殿生活は利他的な快楽に満ちていたに違いありません。

釈尊は、その中に生れ育ち、自らも馴んだ卜占も祭祀も享樂もすべて打ち捨てて、独り、自らとの対決の旅に出られたのでした。

(つづく)

# 浄土真宗よろず心得

## 葬儀 ②

### 二、臨終から拾骨まで

② お寺への案内と無上仏様のお迎え

まず身近な肉親縁者へ連絡します。近所の方へ連絡し、町内会(講中)等の世話役に連絡してもらいます。また、なるべく早目にお手次のお寺へ無上仏様(阿弥陀如来)をお迎えに行きます。服装を正し、門徒式章をかけ、念珠を忘れぬようにしましょう。その際のお寺への出入りは、本堂正面の入口から致します。無上仏様の取り扱いは丁寧にしましょう。

お手次のお寺にお願ひして臨終勸行(枕経)を行っていただきます。

「打ち合わせ」 お葬式の責任者は、遺族と相談して、次のことを打ち合わせて準備します。

- ・最初に、お寺と葬式の日時等を正確に打ち合わせます。
- ・親戚・知人・勤務先に知らせる手配をします。電話や口頭で伝える時は、冒頭の挨拶は省き、用件を簡潔に伝えます。
- ・医師の死亡診断書をもらい、地区の役所へ死亡届を提出し、火葬許可証をもらってきます。

- ・親戚・知人などがかけつけるので、茶菓子などを準備します。
- ・役割を決め、責任者を指名します。(受付・連絡・式場・進行司会・僧侶のお世話・炊事・接待・買物・借物・火葬場・駐車関係などの係)
- ・墨・筆を準備します。遺影の手配など。

### 注意

遺体の枕元(枕飾り)に一本箸を立てた御飯・団子・水・お茶はあげません。枕飾りをされる場合、できるならば、それを通して向こう側にご本尊(阿弥陀如来)を礼拝できるようにします。

。「線香は一本しか立ててはいけない、線香をたやす、たやさない」などというのは、何の根拠もないことです。線香は折って点火し、香炉の中に横にして入れます。

。逆さ屏風・魔除けの守り刀・旅装束・六文銭・茶碗を割る。衣服の裾を頭の方にして被らせたりなどのような迷信やまじないを絶対にしません。額などに白紙をはることも同じです。

### ③ 納棺

臨終勸行が済みますと、俗に湯灌といわれておりますが、沐浴の式をします。浄水を沸かし、遺体を丁寧に拭き、清浄な衣服を着せ、合掌させて、念珠をかけ、棺に納めます。

。「荘厳」 打敷(白色)をかけ、供物(赤色を除く)を供えます。花は赤色をはぶき、ろうそくは白か銀にします。

。「注意」 棺の中へは故人ゆかりの品々を入れても差し支えはありませんが、燃えないものは避けましょう。また中へは旅装束やお金・人形・他宗社寺のお札を入れたりはしません。お浄土に生まれるのに、わらじやお金は不要だし、魔よけだといって守り刀など置くのも不要です。棺の位置は、仏壇の直前を避け、向かって右側に少しずらして安置します。

### ④ 通夜

葬儀の前夜、喪主・家族・親族及び知友などの人々が相集って、生前の事蹟などを語り、最後の夜を棺のそばで過ごすことを通夜といえます。俗に「よとき」ともいわれています。

。「荘厳」 荘厳壇(祭壇とは申しません)は正面に必ず「南無阿弥陀仏」のお名号(又は無上仏様)を懸けますが、時には遺影・写真等に隠れて、お名号が殆ど見えない場合がありますから、お名号やご本尊(尊像)が拝めるように工夫して下さい。

。「注意」 浄土真宗では線香は立てません。線香は横にします。できれば焼香します。また礼拝の時、盤を打つ必要はありません。仏前にお膳や水は供えません。

(つつく)

(「浄土真宗葬儀よろず心得」より取捨)

## 西照寺行事案内

春季(祠堂) 永代経

三月二十二日

速夜(午後二時)

二十三日

日中(午前九時) 速夜

二十四日

日中・速夜

布教使 梅原忠俊 師

降誕会

五月十日

速夜(午後二時)

初夜(午後七時)

布教使 百山秀敬 師

盆会

七月十四日 速夜

十五日 日中・速夜

(仏教婦人会追悼会)

布教使 秦 現永 師

お誘い合わせの上、

ご参詣下さいませ。